

序論

今や、携帯電話の実用者(15歳以上65歳未満)と言われる人口の95%が、携帯電話を所持していると言われ、我々の生活の中で携帯電話は、切り離すことのできない文化とさえ言えるようになってきた。もちろん、私自身も何年も前から携帯電話を所持している者の一人であり、良くも悪くも携帯電話から放たれるさまざまな情報や影響力から、我々の生活を左右する可能性がある。現実には、携帯電話を悪用した事件をニュースで度々耳にするが、携帯電話がうんだ文化というのは、こうした問題点ばかりではなく、我々の生活を豊かにするような利便性も沢山あるはずだ。私は今回、この『ケータイ文化の功罪』を考えることで、携帯電話を持つ人間の心理も追求し、その現状を知っていくことで、今後の生活で携帯電話とうまく付き合っていくことの手立てが出来ればいいと思う。

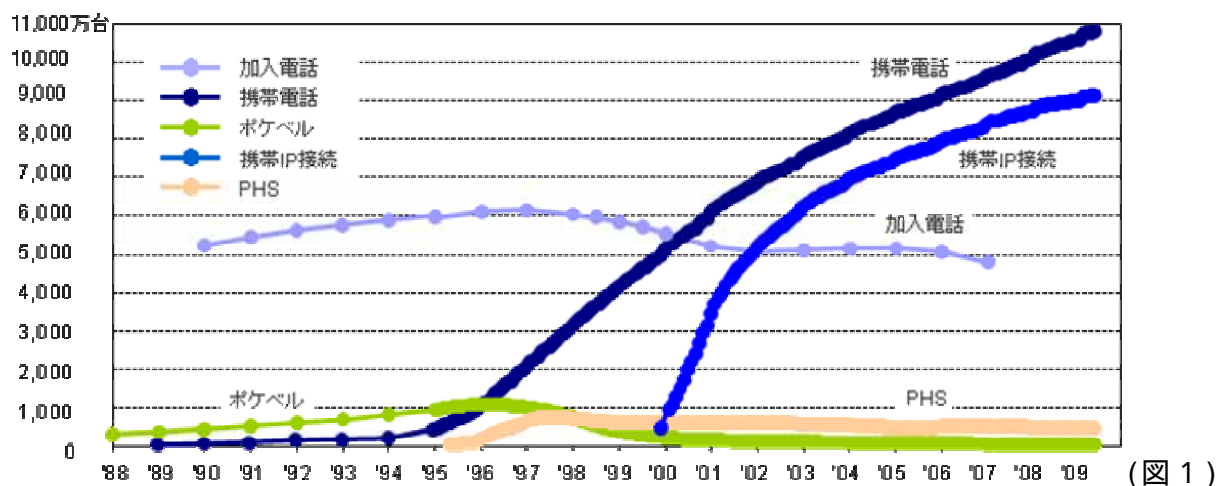
本論

1. 携帯電話の普及

携帯電話というのは、固定電話のように特定の場所にいなくては通話できない通信機器とは異なり、場所や時間を気にすることなく、身軽に持ち運びのできる通信機器として、普及が広まった。それも、何十年前の話ではなく、携帯電話が文化とまでいえるようになったのは、ここ十年足らずの話であろう。これは、ただ単に便利な道具だからという興味本位ではなく、時代のニーズに合い、人々の欲求に応えたものであったからだ。更に、携帯電話が誕生した当初は、それこそ通話を目的とした通信機器であったが、今では携帯電話のもつ機能というのは計り知れないものがある。その中でも、メール機能などインターネットの通信機能を利用する人口は、携帯電話を所持しているほぼ100%に限りなく

近いものだと言えるだろう。次のグラフは、これらのデータが一目で分かる。

加入電話・携帯電話等の累計加入台数の推移（2009年6月末）



一般的な加入電話の台数は20年前からほとんど変化がないのに対して、携帯電話の加入台数は目まぐるしいほどの推移である。これは、私の一考であるが、90年代にバブルが崩壊し、それまでのゆとりや華やかな生活とは一変、ビジネスに対するものの見方、考え方が人々のなかで変化していき、プライベートの時間までも連絡が容易にできる環境をつくっていったのではないかと思った。

2. 携帯電話のもつ利便性

インターネット機能

携帯電話にインターネット機能がついているというのはただ単純に、メールができる・インターネットで遊べるという娯楽目的だけではなく、災害時に非常に役に立つことを忘

れてはならない。電話というのは、災害時のように、皆が一度に集中して連絡をとろうとすると、回線がパンクして、使用が不可能になることがある。実際に、1995年1月に起きた阪神大震災でも電話はあまり役に立たなかった。「そんな状況の中で、現地の様子をいち早く世界に伝えたのがインターネットであった。しかも国内相手ではなく、海外のメディアやボランティア団体向けに発信された情報が役に立ったというのは、皮肉なことであった。インターネットが災害に強いことが実証され、非常時の情報伝達手段として非常に有効であることが証明されたのである。携帯電話は誰にでも利用できる。大地震に遭っても、基地局さえ破壊されなければ平常通り使用できる。いくら大地震といっても、すべての基地局が破壊されることはまずない。もし自分のいる位置の基地局が破壊されているなら、ちょっと場所を変えて、破壊されていない基地局のエリアに移動すれば、どこでも通信できる。」(1)

日本は島国で、地震大国ともいわれていることから、災害時の連絡手段はとても大切なものである。その中で、この携帯電話のインターネット機能というのは、身近かつ正確で、一度に多くの情報を、多くの人々や、世界に発信できるため、とても優れたものであるといえる。このように、場所や状況を選ばずに使用できるというのは、携帯電話のもつ最大の長所と呼べる特徴ではないかと思う。

幅広いコミュニケーションのあり方

ある特定の人とのコミュニケーションをとることはもちろん、今では世界中の人々とのコミュニケーションをとることができるのが携帯電話である。もちろん、それが原因で事件に繋がることもあるのだが、今は利点について述べたいと思う。

まず、今まで携帯電話など、使いこなすのが難しいと考えて利用者が少なかった高齢者の方々も、ドコモが開発した、らくらくフォンやメディア・CMなどの影響によって所持する人がとても増えた。これによって、一人暮らしをしている高齢者の家族は、連絡を取ることが容易になり安心できる。これは、小さな子どもにも言えるようだ。今では、小学

生の半数近くが携帯電話を所持しており、これには賛否両論、人によってさまざまではあるが、誘拐などの恐ろしいニュースがしばしばある世の中では、親の立場から考えると、子供の居場所が把握できる携帯電話というのは、有効なコミュニケーションツールであるのであろう。

また、日本国内に止まらず、世界に向けてのコミュニケーションの取り方にも変化があるように思える。今までは、企業や大きな組織でもなければ、個人的に海外の人と連絡を取ることは、滅多になかったが、今ではそれも珍しいことではない。私自身も、携帯電話を利用して海外の友人と連絡を取ることが結構ある。国際社会と呼ばれる今、企業・個人ともに、海外に向けて情報を簡易に発信できるというのは、とても大きな意味を持ち、これからの経済成長に役立つといえるであろう。

ファッション性による経済効果

携帯電話を所持することに伴って、さまざまな経済効果が考えられる。若者は、携帯電話をファッションの一部として所持していることもあり、見た目にもとても重要視を置く。

例えば、ケータイストラップというのは今ではものすごい数のデザインや種類が出ているが、“ある有名人が持っているストラップ”という情報が流れれば、その商品は爆発的に売れることもあるし、観光地のお土産売り場には必ずと言っていいほど、その土地の名物ストラップが置いてある。また、デコレーションといって、スワロフスキーなどのキラキラとした宝石を携帯電話に飾り付けをしている者も多くいるため、今ではデコレーション専門のお店まで出ている。

携帯電話がうむ経済効果というのは、なにもファッション性に伴ったものだけではない。着信メロディーもそのひとつであろう。流行りの歌が簡単にダウンロードでき、次第にメロディーだけでは止まらず、着うたといって、曲に歌が入り、一曲まるまる聴けるようになり、今では携帯電話限定で配信し、聴ける曲なんかもあるのだ。

携帯サイト一つをとっても、携帯会社は、顧客確保のために、さまざまな創意工夫を凝らし、我々はその中で自身のニーズに合うものを取捨選択する。企業のこのような競争もまた、経済効果につながっているのではないだろうか。

3 . 携帯電話の問題点

今まで、携帯電話の良い点ばかりをいってきたけれど、やはりその中には問題点も沢山伴っており、こうした問題ともきちんと向き合っていかななくてはいけないであろう。

1 携帯電話を使った犯罪

不特定多数の人間が、簡易的に利用できるインターネットというのは、援助交際という名の売春行為や、薬物などの密売に使われたりと、本来の使用目的ではなく、犯罪に使われることも少なくない。直接顔を合わせずとも、相手とのやり取りができるため、犯罪の手立てとしては、好都合としかいいようがない。

また、固定電話に比べ、逆探知気が難しく時間がかかることから、誘拐犯人が身代金の要求など、取引に使用することも多い。

実際の事件を例に挙げると、「九一年十一月に起きた富士銀行員誘拐事件では、犯人は銀行側に対し、携帯電話を用意するように繰り返し要求している。さらに『携帯(の提供)はN T Tに頼むな。細工されて逆探知記されるからな』などと注文をつけてもいる。銀行側が携帯電話の番号をなかなか教えなかったため、一回の通話の中で『番号は?』と十一回も繰り返して聞くなど、犯人は激しくいらだっていたという。なぜ犯人は、携帯電話にそれほどこだわったのだろうか。

携帯電話から逆探知する場合、一般の有線電話に比べて経由するN T Tの無線中継局が多くなるため、それだけ時間がかかる。犯人は、九一年の時点ですでに、携帯電話が逆探知されにくいことを知悉していたのだ。

九一年という、携帯電話の売り切り制が導入されて一般に普及する九四年より三年前であり、携帯電話の加入者はまだ百万人台にすぎなかった。その頃から携帯電話が誘拐犯人に使われようとしたわけで、犯罪者が犯罪のツールとしての携帯に目をつけたのは、はるかに早い時期だったのがわかる。」(2)

このように、新しい技術によって、我々の生活を豊かにする一方では、モラルなき人間の欲望が必ず糸を引き、犯罪への後押しをしてしまうこともあるということを、分かっていなくてはならないだろう。

ルーズな感覚

携帯電話というのは、いつでも・どこでも連絡を取ることができるという、利便性がある一方で、人々の感覚をルーズにしてしまう恐れもあるのではないか。現代人の多くが時間に無頓着であったり、遅刻ということにあまり罪意識がないのは、携帯電話の存在が大きいかかわっていることは間違いない。

携帯電話がまだない時代というのは、待ち合わせに遅れていけば、遅れた分だけ相手を待ち合わせ場所で待たせてしまうことになる。故に、遅刻をしないように行動しようと考えることができる。だが、今の時代はどうであろうか。携帯電話という、分刻みで連絡の取れる手段があるということで、待ち合わせに遅れそうになったら、その時点で相手に連絡を取る。故に、相手もじっと待ち合わせ場所で待つことはせずに、カフェに入ったり、買い物をしたりと、時間を無駄にしないように過ごす。確かに、連絡をしないよりは、このように事前に伝えた方がよいし、交通機関の遅延など、仕方のない状況においては、時間の見通しが立たないため、携帯電話というのはとても有効的だと思う。しかし、ここで問題なのは、罪意識が低下し、遅刻に慣れてしまうことだ。相手を待たせているという感覚がないため、また相手側さえも、待たされたという感覚が薄れるため、現代人の多くが時間にルーズになり、その感覚に麻痺しているというのは、問題である。

依存性

携帯電話依存症という言葉がうまれるくらい、携帯電話を手放せない人々が増えているように思う。携帯電話が常に自分の手元がないと落ち着かなくなってしまう、症状がひどくなると、携帯電話を取り上げようとする、逆ギレをしたり、暴れたり手のつけようがなくなることもあるようだ。ここまでの症状がなくとも、身の回りで思い返すと、電車の中でほとんどの人が携帯電話を操作していたり、街中で携帯電話を見ながら歩いていた、食事の最中も携帯電話を片手に置いていたり、自分自身にも思い当たる節があるのではないかと。こうした症状も、一種の携帯電話依存症といえるだろう。

さらに、この依存症が引き起こす問題の一つとして、自動車の運転中の携帯操作である。今でこそ、運転中の携帯操作は禁止になり、見つかった場合は罰則の処置が取られ、少しは気をつける者が増えたが、それでも未だに携帯電話を操作していたり、通話をしていたがために、事故へとつながるケースも少なくない。本来このような規定がつけられる前に、個人個人のモラルによって気をつけなくてはならないことであるが、それができないというのが現状なのかもしれない。

携帯電話というのは、コミュニケーションの手段の一つとして有効ではあるが、直接相手と会わなくても、通話やメールで満足してしまい、会っている時と同等な錯覚に陥るせいか、携帯電話さえあれば良いと考える者が増えてきた。それは、誰ともコミュニケーションを取りたくないからというのではなく、むしろその逆であり、常に誰かとの繋がりを求め、携帯を手放せなくなるのだ。また、インターネット上で、見ぬ知らずの人と気軽に交流ができ、顔も素性も知らない相手に、気をゆるしてしまう。いつでも・どこでも容易に連絡が取り合える携帯電話というのは、それ故に、依存症を引き起こしかねないのである。

ストレス社会と呼ばれる今、人々は何かに精神的依存を求めたがるが、身近かつ、誰もが持っている携帯電話に依存してしまうのは当然の流れのように思われるが、その弱みに付け込む悪の手が身近にあることも決して忘れてはならないのが現実だ。

結論

“ケータイ文化の功罪”ということで、自分にとってもとても身近な課題を取り上げたが、人間の欲望によりその役割は“功”にも、“罪”にも変容してしまうのだと分かった。人々が豊かに、快適に暮らすことを目的とし、技術開発が進んでも、その裏では必ずと言っていいほど、モラルなき犯罪者の影があり、いかにその技術を悪用し、自分の利益を得るかを追及している。当たり前に見えるかもしれないが、我々はそれらに踊らされることがあってはならない。悪が通る世の中というのは、それを需用したいと思う者がいるからだ。特に、今のように社会的に不安定な世の中において、その弱みに付け込みやすいのも事実だ。そうした“罪”をゼロにすることは、不可能かもしれないが、我々の意識一つで減らすことは可能なはずだ。商品というのは、需要が少なければ供給も減り、次第に消えていく。携帯電話の“罪”も、同じことが言えるはずだ。そして、それが我々の生活を豊かに変えようと開発してくれた技術者への恩返しとなるのではないか。

そしてもう一つ、コミュニケーションのありかたの見直しが必要である。不特定多数の人間とネットワークで繋がることに悲観的なわけではない。そこから、異国の文化が見えてきたり、豊富な情報交換ができたりと、我々の価値観を豊かにしてくれることも沢山あるからだ。ただし、携帯電話一つあれば、全てが済むと思ってしまうような現状を解消する必要はあるはずだ。家族・友達・学校・地域などが、子供のころから、人とのコミュニケーションをとる大切さを教えなければならない。何が、人との繋がりなのかが分からないような世の中だから、ネットワークに依存し、犯罪へと知らぬ間に巻き込まれてしまうケースが多いのだ。これは、大人になって急に指摘されたところで、見直すのは容易なことではない。子供のころからの教えがとても重要になってくるのだと思う。

携帯電話というのは、これからますます発展し、機能が豊かになることはあっても、携帯電話がなくなるというのは考えられない。犯罪のルーツに使われることがあって、社会

的に嫌煙されることがあっても、なくならないだろう。それは、携帯電話がもう“文化”であるからだ。今の世の中から携帯電話がなくならないのならば、いかに上手く付き合っていくかを個人個人で考え、利用していくしかない。物事にも良い点と悪い点が交差して存在するように、“ケータイ文化”にも“功”と“罪”が存在しているのだから、モラルある行動が、一人一人に求められるのだと思う。

(図1) http://www.infonet.co.jp/ueyama/ip/communication/cellular_phone.html

(1) 松葉仁、『ケータイのなかの欲望』、(株)文藝春秋、平成14年1月20日、35,36頁

(2) 松葉仁、『ケータイのなかの欲望』、(株)文藝春秋、平成14年1月20日、68,69頁

要約

携帯電話実用者といわれる人口の約95%が所持しているという携帯電話の普及は、ここ10年前くらいから急速に延びており、それによって我々の生活が豊かになったことは確かであるが、それとともに問題点も沢山ある。犯罪のルーツに使われたり、携帯がないと生活できなくなる依存症を引き起こしたりマナーの意識が薄れたりと・・・。

ただ、本来携帯電話を開発した技術者というのは、人々の生活が豊かに便利になるために作ったものであって、こうした悪い点ばかりではなく、良い点も沢山ある。非常時の連絡に有効であったり、コミュニケーションの幅を広げたり、ファッション性に目をつけることで経済効果に一目かったりと・・・。

ケータイが“文化”とまでいわれるようになったこの世の中で、その“功”と“罪”をきちんと知ること、今後の生活の中で携帯電話と上手く付き合っていく手立てができればよいと考える。

携帯電話の普及

利便性

インターネット機能

コミュニケーションのあり方

ファッション性

経済効果

犯罪

ルーズな感覚

依存症

